

平野 栄次さん (明治25年生)



私は明治44年12月末新得へ来たのです。翌年2月獣医師を開業しました。営業範囲は新得はもちろん、清水、鹿追、後には落合、鹿越にも出張しました。屈足などは、初めの頃は徒歩です。一日二往復したこともありましたが、若かったのです。自転車の無い時代でしたから。後からは馬で回ることにしました。若者であった私を馬の医者ということで随分と頼りにされたもので

すから、本当に一生けんめいつとめました。200頭程は診ていたと思います。

その見廻り仕事での思い出の一つに、悲願桜の伊藤伝五郎さんの住居のことで、現在で表現するならば、新得高校通りと、墓地に通じる路との交差点より100m程南へ寄った地点であったと記憶します。やはり、馬がおりましたので、見回りに度々行きましたので承知しております。家の造りは、当時はどこでもみられる建てかたで、屋根は笹葺き、壁はエン麦や萱で囲っており、間取りは10畳か12畳位の広さで2間があり、その半分は土間、入口近くに、大きないりりがあり、火は絶えず燃やされていたようです。隣接して馬小屋があり、馬の顔をいつでも見られるように出来ていた。

ある秋、見回りに寄りました折小さい娘さんがひとりおりまして、囲炉りに、足をふみ込むようにして、着物の前が割れて、小さい娘さんの内股がいろりの火にあぶられて、赤く染めながら、暖を採っていた姿が今でも思い出すことがあります。

当時の家の造りから考んがえて、火災になったら、それはもう、ひとたまりもないことであろうと思います。屋根も壁も、燃えやすいものばかりですからね。神社の桜を見る度に当時のことを思い出します。

次にわね、大正11年8月大洪水ありましてね。それは、もの凄いものでした。佐幌川の橋は全部流されましたから、とにかく、降るといふより「バケツ」で撒いたと表現することが当たっている程の大雨でした。その大降りが3～4日続いたと思います。当時私の家は、現在の金物屋高橋さんの裏に当る所にありましたが、朝起きて玄関の戸を開けましたところ目の前2～3尺位までの川水が寄っているのです。驚きました。水が流れるというより、水と水が渦を巻き押し合っていて流れてる感じでした。恐ろしかったですね。

この年は、農家も大変な年になりましたね。

